院雑誌発刊に寄せて

雲南市立病院　院長　大　谷　　順

このたび10年ぶりに病院雑誌の発刊が叶い，院長として大いなる喜びに浸るとともに，長期にわたる休刊の期間，職員，OBの皆様をはじめ関係各位には多大なご心配とご迷惑をお掛け致しましたことに対して，この場を借りて心よりお詫び申し上げます。

光陰矢のごとしとも申しますが，この10年間は瞬く間に過ぎてしまったような気がします。年齢を重ねるほど一年が短く感じるという所謂ピエール・ジャネの法則のせいかも知れませんが，これはすなわち忘れてしまう事が増えたということでもあります。

今回巻頭言を記すにあたり，日々物忘れに悩む自分の備忘録も兼ねて，休刊に至った10年前から今日までの当院の変遷を振り返ってみたいと思います。

平成18年３月に発刊された公立雲南総合病院雑誌第12号をもって，当院の情報公開の扉は一旦閉ざされました。思い起こせばこの時期は，平成12年に診療報酬マイナス改定に端を切った医療制度改革の荒波がボディー・ブローの様に地域の医療機関を追い詰め，さらに平成16年度の新医師臨床研修制度により，いよいよ決定的なダメージが当院をはじめ地域の病院に現れてきた頃でした。「医療崩壊」という言葉が現実味を帯びて迫ってきた時代でもありました。

医療制度改革のなかでは地域への医師派遣機能を有する大学医局も相当なダメージを負っており，予想以上のペースで医局からの医師大量引き揚げがはじまりました。平成14年に34名であった常勤医数は，平成18年には25名にまで減ってしまいました。当然経営状況は悪化の一途を辿り，これに追い打ちをかけるように平成19年11月27日には，新聞誌上で「雲南病院経営危機」というセンセーショナルなタイトルで取り上げられ，職員はもちろん地元住民に大きなショックを与えました。報道以降，風評も加わり経営環境はより一層悪化していきました。こうなってくると泥舟から逃げ出す何某かのように，医師だけでなく医療職も少しずつ減っていきました。いわゆる「立ち去り型サボタージュ」です。一方，残された者は日を追うごとに多忙になるなかで，とても病院雑誌の編纂に向かおうという気概は出てきませんでした。

こうして平成19年以降，病院雑誌の発行休止のみならず，忘年会等の病院行事もどんどん縮小，廃止されていったことが昨日のように思い出されます。経営維持のため病床数も減らさざるを得なくなり，救急医療をはじめ，病院機能もどんどん低下していきました。院内の雰囲気は非常に暗く，日々の会話の中にも棘のある言葉が見え隠れし，皆が疑心暗鬼に陥っていたように思います。とくに印象に残っているのは，救急告示病院を返上する，しないで医局が二分して大もめにもめた平成19年のある月の医局会でした。賛否それぞれの言い分がぶつかり合い，怒号も飛び交う，まさに当院の暗黒時代を象徴する出来事でした。救急を止めた方が良いという人たちの言い分は，「救急患者にはどんな重症病態が隠れているか分からないので，当院で診るのはもっての外で，最初から高次医療機関に行くべきである」と，まさに疑心暗鬼ここに極まれり，貧すれば鈍するを地でいくものでした。結局，大塚昭雄院長（当時，現名誉院長）が，国保直診施設の使命として，救急医療の放棄は絶対にしてはならない。人がいなくて大変なら自分も当直要員に加わるので何とか救急体制は維持して欲しいと訴えられて事態は収拾したのですが，今にして思えば，この時が当院の大きな分岐点だった気がします。この一件でさらに複数の医師が去っていきましたが，潮目は明らかに良い方向に変わりました。その後，松井　譲副院長（当時，現事業管理者）や服部修三副院長（当時，現特別顧問）の力強いリーダーシップのもと，残された者が奮起し，さらに苦境の中であったからこそ生み出されたともいえる「地域医療人育成センター」の設立で集まってきた研修医や，「地域総合診療科」の創設による総合診療の導入，その趣旨に共感する医師の就職等により，縮小の一途を辿っていた救急医療は徐々に息を吹き返していきました。加えて地域に必要とされる病院への変化を目指し，良質な医療を行うための健全経営という意識改革を職員全員が共有し，

接遇やコスト意識もより一層高めていきました。病院を支援する市民団体による心強い応援も忘れることが出来ません。平成23年からは市立病院化したことを契機に，設立母体である雲南市に加えて，市が支援する医療系NPO法人などとも協力して，改めて地域のニーズに最大限応え，地域とともにある病院として今日まで歩んできました。

こうした努力の結果，少ない人数にもかかわらず，地域の病院としては屈指の高い病床稼働率も達成，維持ができるようにもなり，経営指標も好転，平成22年には17名にまで減ってしまった医師数は，翌年の平成23年に市立病院として再出発をしてからは徐々に増え，今年４月の時点で22名にまで回復しました。そして今年度中には安定した病院運営が可能となる当面の目標医師数25名になる予定です。そして，安定経営を追い風にして，ついに長年の悲願であった新病棟の建設が現実のものとなり，竣工まであとわずかとなりました。簡単にこの10年を振り返ってみましたが，先も見えず，絶望的な状況のなか，職員全員が一致団結できたこと，また市民の皆さんからの心強い応援を頂いたことで地域の基幹病院としての矜持を保ち続けることが出来たのだと思います。

こうして10年前の危機を乗り越えつつある私たちが次になすべきことは，医療を通じた地域貢献はもちろんですが，その足跡を記すことです。かのダ･ヴィンチも，エジソンも，アインシュタインも，日常の些細なことを書き留め，その膨大な情報の中から素晴らしい発明や業績が生み出されています。私たちも医療職の義務としても日々の仕事や気付きを記していかなくてはなりませんが，ただありきたりの医療・研究・教育に関する事項の掲載ではなく，地域医療受難の時代に国保直診施設として，地域と協同してどう立ち向かっていくのかを，職員全員が全力で表現する集合知としての病院雑誌作りに臨みます。日々多忙ななか，編纂に携わる職員の皆さんには大変な苦労をお掛けするとは思いますが，次の医療や地域づくりに生かされる病院誌の編纂事業を，当院の基幹事業のひとつとして再び絶やす事なく，末永く続けていくことをお誓い申しあげ巻頭言の結びといたします。